

溝上慎一の教育論(動画チャンネル) No355

(新著の紹介)

大学教育全体の中でボーダーフリー大学を位置付け
教育の発展可能性を模索する 葛城浩一先生(神戸大学准教授)

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<https://smizok.com/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長(2020-2021年)。京都大学博士(教育学)。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。

※公益財団法人電通育英会の研究委託を受けて行われています。

※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

(ご紹介)



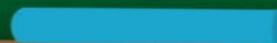
葛城浩一

くずき こういち

神戸大学 大学教育推進機構
大学教育研究センター・准教授

広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻博士課程後期修了。博士（教育学）。広島大学高等教育研究開発センターCOE研究員、香川大学大学教育開発センター講師・准教授を経て、2021年10月より現職。

単著『ユニバーサル化時代の大学はどうあるべきかーボーダーフリー大学の社会学』（玉川大学出版部，2025），共編著『〈学ぶ学生〉の実像』（勁草書房，2024）など



No329

(新著の紹介)

〈学ぶ学生〉の実像 — 大学教育の条件は何か —

濱中淳子先生
(早稲田大学教育・総合科学学術院・教授)

動画チャンネル「溝上慎一の教育論」



葛城浩一 (2025). ユニバーサル化時代の大学はどうあるべきかーボーダーフリー大学の社会学ー 玉川大学出版部

序章 ボーダーフリー大学を読み解く意義はどこにあるか

第1部 ボーダーフリー大学における学習と教育の実態

第1章 学生とはどのような存在か

第2章 教室はいかなる状態に陥るか

第3章 学生はどうすれば学習するのか

第4章 教育の質保証はどうすれば実現できるか

第2部 ボーダーフリー大学における教育と研究の実態

第5章 教員とはどのような存在か

第6章 教員の採用人事はいかに行われるのか

第7章 研究は教育の質保証に資するのか

第8章 学生は研究をどう捉えているか

終章 ボーダーフリー大学はどうあるべきか

それではご覧ください

『ユニバーサル化時代の
大学はどうあるべきか
—ボーダーフリー大学の社会学』

神戸大学
葛城浩一

自己紹介

葛城浩一(2007)「Fランク大学生の資格意識」、「Fランク大学の学生が考える資格と人間性」山田浩之・葛城浩一編『現代大学生の学習行動』広島大学高等教育研究開発センター 高等教育研究叢書90号

葛城浩一(2007)「Fランク大学生の学習に対する志向性」大学教育学会編『大学教育学会誌』第29巻第2号

葛城浩一(2010)『大学全入時代における学生の学習行動－「ボーダーフリー大学」を中心にして』広島大学大学院教育学研究科博士論文

*

科学研究費補助金(若手研究B)「「ボーダーフリー大学」におけるアカデミック・プロフェッションの再構築に関する研究」(2010－2012):研究代表者

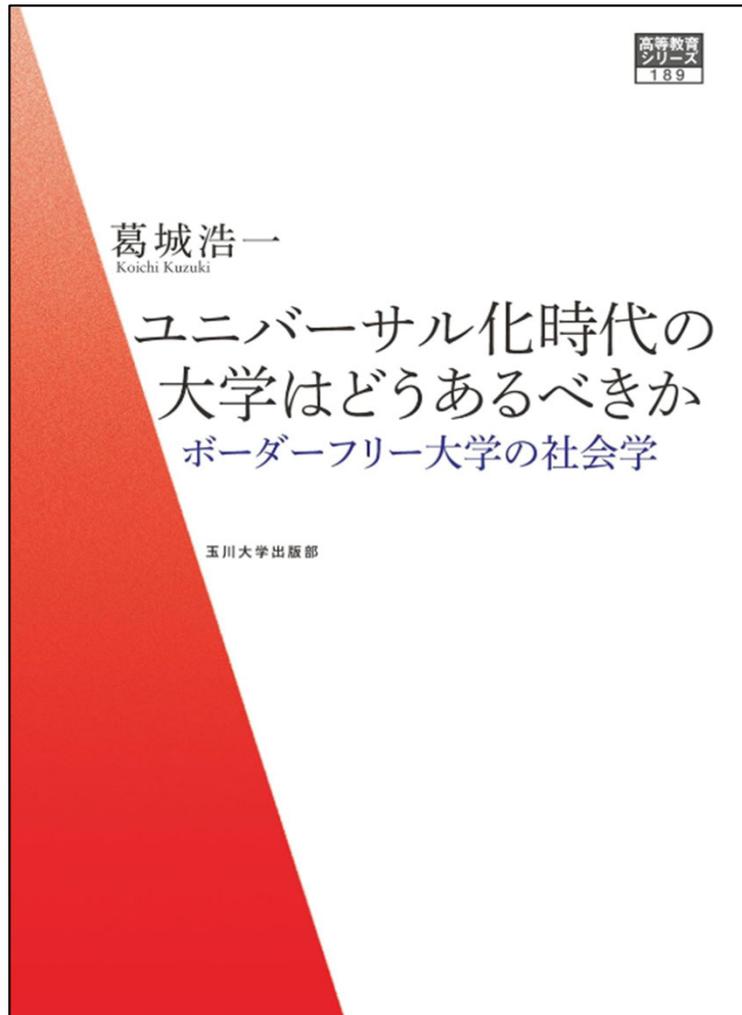
科学研究費補助金(若手研究B)「大学大衆化時代におけるアカデミック・プロフェッションのあり方に関する研究」(2013－2015):研究代表者

科学研究費補助金(基盤研究C)「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証の実現可能性に関する研究」(2017－2019):研究代表者

科学研究費補助金(基盤研究C)「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証のあり方に関する研究」(2020－2023):研究代表者

科学研究補助金(基盤研究C)「ユニバーサル化時代における教育の質保証と大学の生き残りの両立可能性に関する研究」(2024－2027):研究代表者

今回ご紹介する拙著



研究成果の還元へのニーズ
の高まりにこたえるべく上梓

玉川大学出版部より
2025年4月に刊行

ポイント

【問い】

書名にも掲げる「大学はどうあるべきか」という根源的な問い

【対象】

研究対象として長らく等閑視され、印象論で語られがちな
ボーダーフリー大学に焦点を当てる。

【枠組み】

「大学」を語るうえで欠かせない、「学習」、「教育」、「研究」と
いう3つの視角からの総合的なアプローチ

【データ】

類書にはない、豊富かつ多様なデータ

ポイント

【問い】

書名にも掲げる「大学はどうあるべきか」という根源的な問い

【対象】

研究対象として長らく等閑視され、印象論で語られがちな
ボーダーフリー大学に焦点を当てる。

【枠組み】

「大学」を語るうえで欠かせない、「学習」、「教育」、「研究」と
いう3つの視角からの総合的なアプローチ

【データ】

類書にはない、豊富かつ多様なデータ

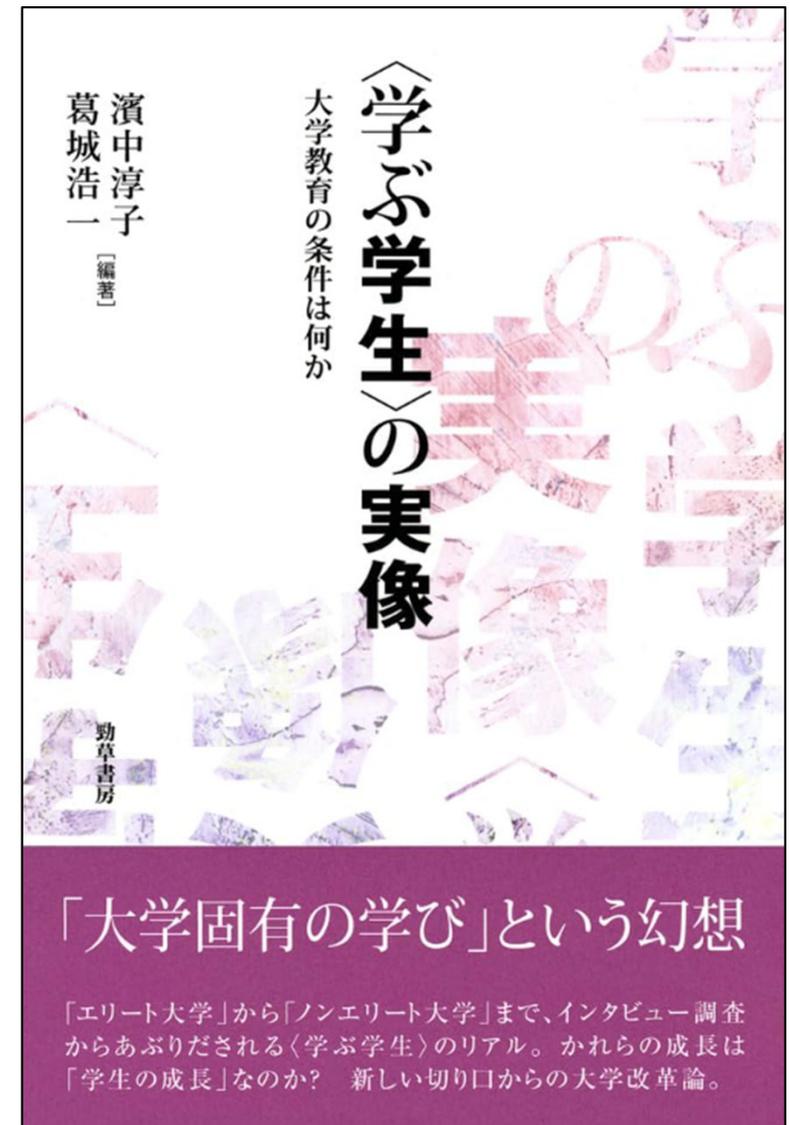
【問い】

本書は「大学はどうあるべきか」という根源的な問いに迫るもの

共編著『〈学ぶ学生〉の実像』では、大学の理念に照らして、大学(教育)のあるべき姿を問うた。
(「上」からのアプローチ)



本書では、ユニバーサル化時代の大学の実態に照らして、大学(教育)のあるべき姿を問う。
(「下」からのアプローチ)



勁草書房より2024年12月に刊行
こちらをあわせてお読みください。

ポイント

【問い】

書名にも掲げる「大学はどうあるべきか」という根源的な問い

【対象】

研究対象として長らく等閑視され、印象論で語られがちな
ボーダーフリー大学に焦点を当てる。

【枠組み】

「大学」を語るうえで欠かせない、「学習」、「教育」、「研究」と
いう3つの視角からの実証的なアプローチ

【データ】

類書にはない、豊富かつ多様なデータ

【対象】

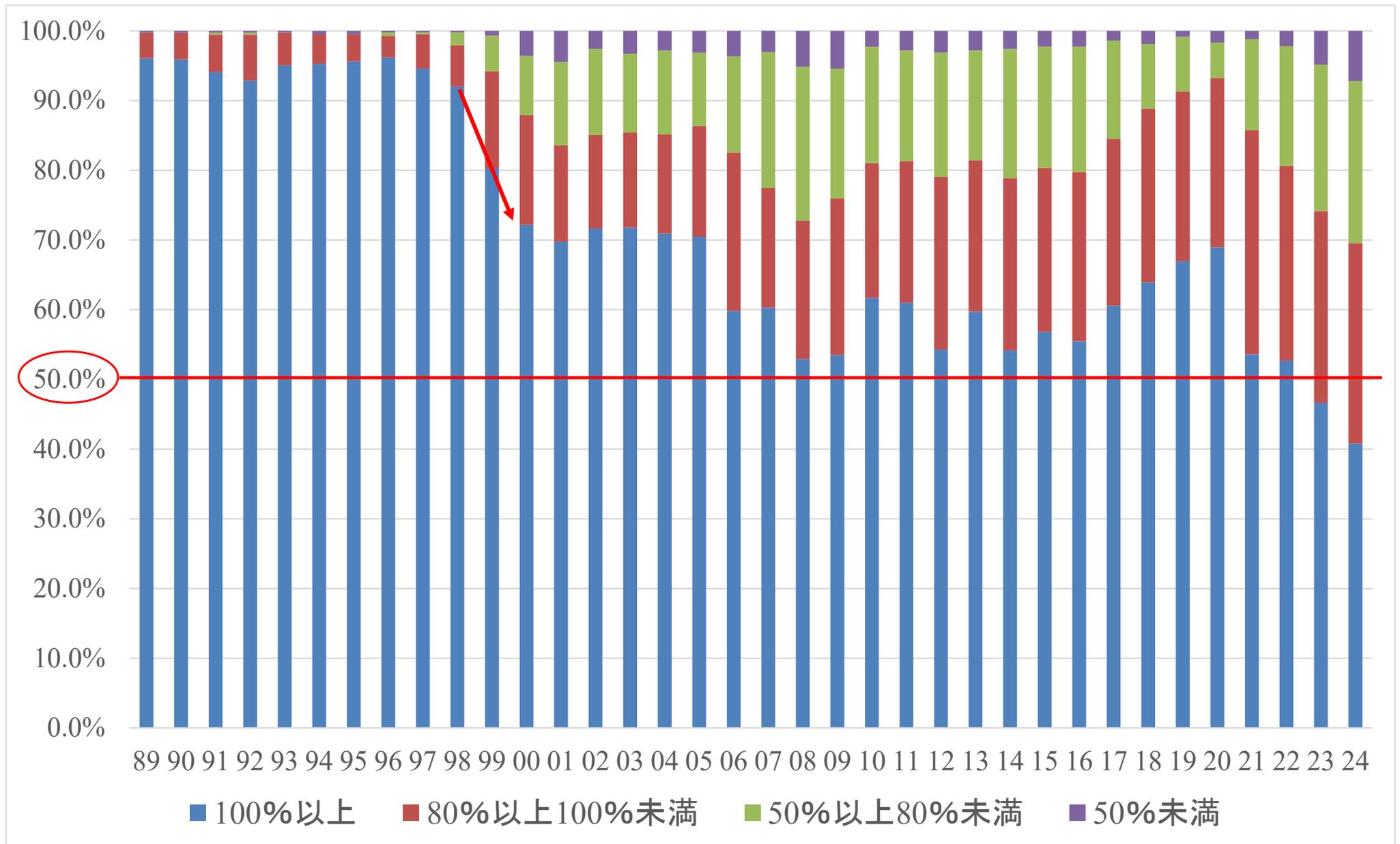
本書は「ボーダーフリー大学」(BF大学)を対象とするもの



「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の
全入状態にある大学」

→定員割れはひとつの目安

私立大学の定員充足状況の推移



注:『令和6(2024)年度私立大学・短期大学等入学志願動向』より作成

【対象】

- ・BF大学は研究対象として長らく等閑視されてきた。
(研究大学こそが研究に値する大学とされてきた)



- ・BF大学を研究対象とすることは、日本の高等教育の今後を占ううえで極めて重要

→BF大学には、日本の高等教育が抱えている問題が凝縮されて顕在化していると考えられるから

- ①BF大学という「周辺」分野に生じる現象に目を向けることは、日本の高等教育のあり方それ自体を問い直すことに
- ②教育上の困難に直面するBF大学に目を向けることは、日本の高等教育における質保証のあり方を問い直すことに

ポイント

【問い】

書名にも掲げる「大学はどうあるべきか」という根源的な問い

【対象】

研究対象として長らく等閑視され、印象論で語られがちな
ボーダーフリー大学に焦点を当てる。

【枠組み】

「大学」を語るうえで欠かせない、「学習」、「教育」、「研究」と
いう3つの視角からの総合的なアプローチ

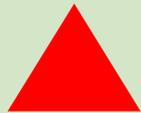
【データ】

類書にはない、豊富かつ多様なデータ

【枠組み】



学習

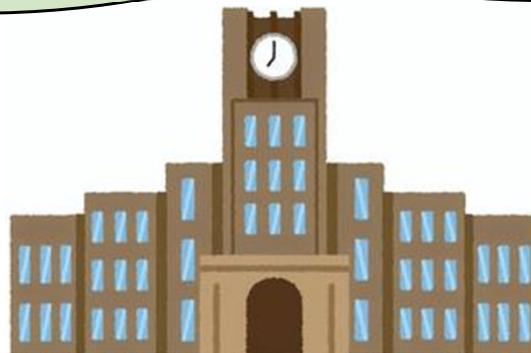
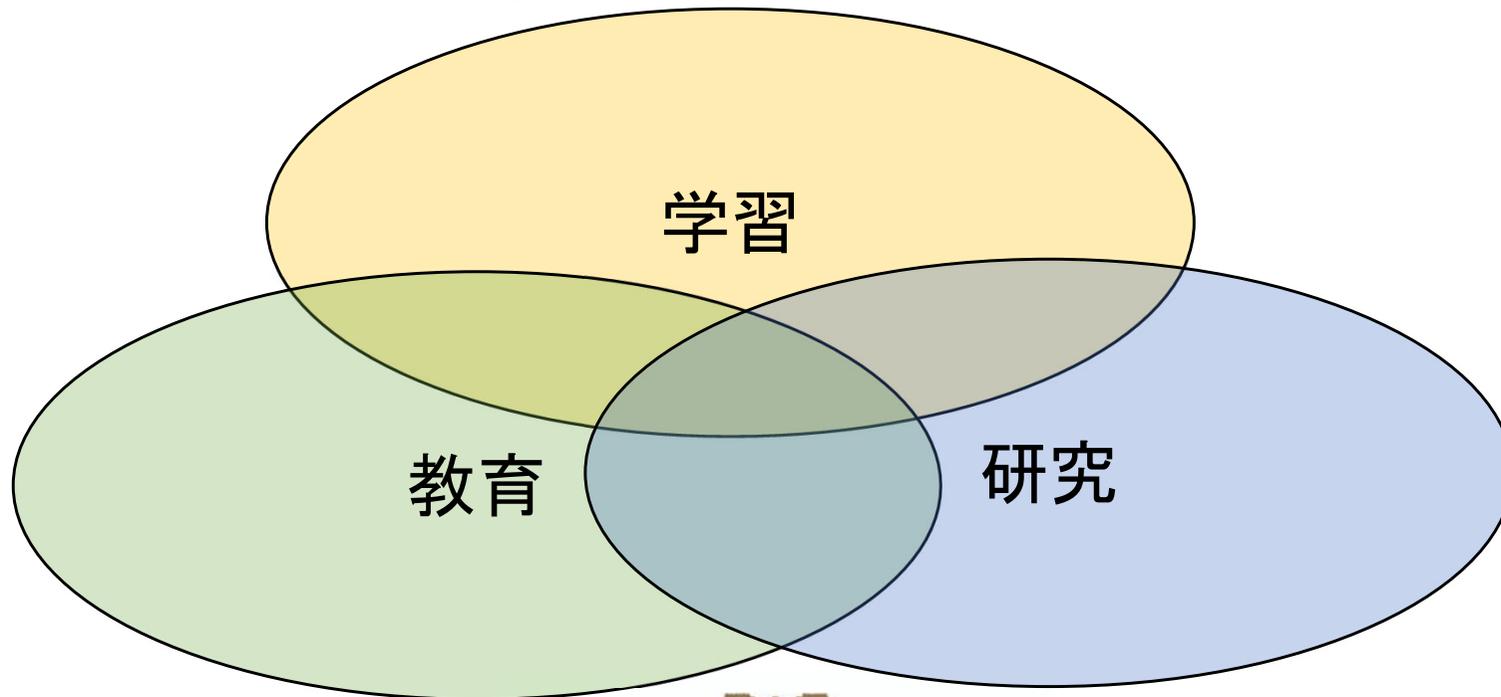
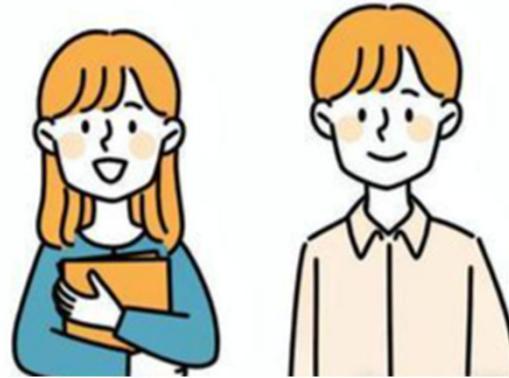


教育

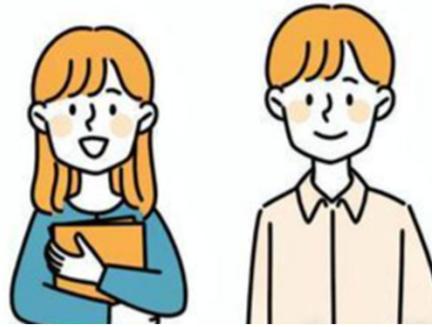


研究

【枠組み】



【枠組み】



学生



学習

1・2章

3章

8章

教育

4章

研究

5・6・7章

大学・教員



第1部

学習と教育の実態

第1章

学生とはどのような存在か

第2章

教室はいかなる状態に陥るか

第3章

学生はどうすれば学習するのか

第4章

教育の質保証はどうすれば実現できるか

第2部

教育と研究の実態

第5章

教員とはどのような存在か

第6章

教員の採用人事はいかに行われるか

第7章

研究は教育の質保証に資するのか

第8章

学生は研究をどう捉えているか

第1章 学生とはどのような存在か

2 | 学習面での問題を抱える学生の実態

前節では、学習面での問題を抱える学生が入学者に占める割合を、入

と考えるか、自由記述でたずねている。そこに記述されている内容から、ボーダーフリー大学生が抱える基礎学力欠如の実態を具体的にイメージしていただきたい。

- 中学卒業程度の国語、数学、英語はほぼ完璧に自分のものにして
いること… (10) 工学系
- 中学卒業程度の国語（最悪、小学生程度の漢字）と算数の能力。…
(10) 社会科学系
- 小学校レベルの算数（分数や九九含む）ができるようになること。
… (10) 工学系
- アルファベットは正しく書ける、読みもできる能力。ローマ字が
読み、書きができる能力。… (7) その他（語学）

の国語、数学、英語はほぼ完璧に自分のものにして
0) 工学系
の国語（最悪、小学生程度の漢字）と算数の能力。…
系

算（分数や九九含む）ができるようになること。

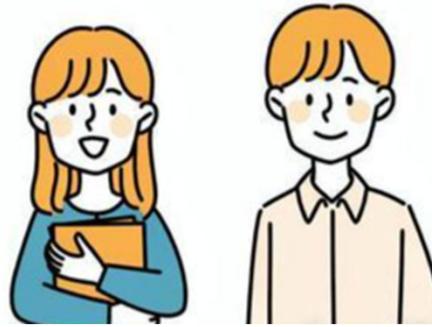
は正しく書ける、読みもできる能力。ローマ字が
きる能力。… (7) その他（語学）

中学卒業程度の国語、数学、英語はほぼ完璧に自分
のような、中学校レベル「まで」の基礎学力につい
くみられる。ここで中学校レベル「まで」と強調し
程度の国語（最悪、小学生程度の漢字）と算数の能力」、
又（分数や九九含む）」のような、小学校レベルの記述
ある。ここで留意したいのは、括弧内の値である。
た知識・技能・態度等を何割程度の卒業生に身につ
多えるのかをたずねた結果を示したものであるが
全員に身につけさせるべきだと考えていることになる）、「ア
く書ける、読みもできる能力。ローマ字が読み、書
至っては、卒業生全員に身につけさせることは難し
ている（この記述では3割の卒業生には身につけさせること
いる）。こうした記述から、ボーダーフリー大学では
学力を卒業生全員に身につけさせるのもそう容易な
られていることがわかるだろう。

大学生』が出版されてから四半世紀が経過したこと

- あまり多くのことは望めません。最低限の読み書きの力だけでも
身に付けてもらえればと思います。（中略）仮に読み書きができな
いとしても、自分が読み書きができない人間だという自覚をもっ
てくれればよいと思います。… (9.5) 社会科学系

【枠組み】



学生



学習

1・2章

3章

8章

教育

4章

研究

5・6・7章

大学・教員



第1部

学習と教育の実態

第1章

学生とはどのような存在か

第2章

教室はいかなる状態に陥るか

第3章

学生はどうすれば学習するのか

第4章

教育の質保証はどうすれば実現できるか

第2部

教育と研究の実態

第5章

教員とはどのような存在か

第6章

教員の採用人事はいかに行われるか

第7章

研究は教育の質保証に資するのか

第8章

学生は研究をどう捉えているか

第2章 教室

なものや常識すら
「授業に来るけど、す
らまだしも、「椅子に寝
なってねている」あたり
い（ちなみに、「うたたね」
わず知らずとうとう眠るこ
その確信犯的な行動は、
その一歩行動自体は「

- イヤホンをつけて授業を受けていたり、PSP（ゲーム機）をいじっていたり、大音量で音楽を流していたり、マンガを読んでいたり。無法地帯レベルは店の駐車場さながらである。（1年・女性）
- 授業中にご飯を食べていたことです。（中略）ご飯なので、多少においがしていたのですが、うちわや下じきであおいでそれをかくしていました。ふつうにおかしも食べていてびっくりしました。（4年・女性）
- 後ろの方の席だったが、その中での（原文ママ）電子たばこをくわえる。（2年・女性）

- 授業中にさわいでいて先生に注意された時に机をケリ、「ウザ」と言い、教室を出て行った。次の授業で注意された時も同じ様にキレてドアを強く閉めてみんなメイワクしていた。（中略）いびきをかいていて、先生に起こされ、逆ギレして「なんや。」などなっていた。それで授業を進めれなくて他の人は困っていて、その事を先生が言うと、イスなどをけったりして、教室を出て行った。（4年・男性）
- 先生に向かって、平気で暴言を言い、反抗する学生。英語の授業だったが、先生から英語で質問した瞬間に「分かるわけないだろうが」と言っていた。先生は、「考えようとしたの？」と聞き返したが、その生徒は、「知るか。死ね」という暴言を吐いていた。

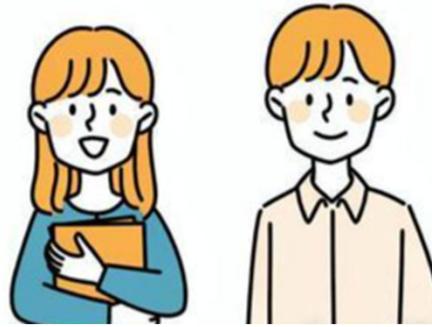
への反抗

「ながら受講」とみてきたが、これらは程度差はあった
ボーダーフリー大学以外の大学でもみられうるものである。
社会的逸脱行動だとするならば、ボーダーフリー大学を特徴
は、「教員への反抗」という反社会的逸脱行動であろう。
みよう。

にさわいでいて先生に注意された時に机をケリ、「ウザ
、教室を出て行った。次の授業で注意された時も同じ様に
ドアを強く閉めてみんなメイワクしていた。（中略）いびき
かいていて、先生に起こされ、逆ギレして「なんや。」など
いた。それで授業を進めれなくて他の人は困っていて、そ
先生が言うと、イスなどをけったりして、教室を出て行っ
（4年・男性）

って、平気で暴言を言い、反抗する学生。英語の授業
生から英語で質問した瞬間に「分かるわけないだろ
いた。先生は、「考えようとしたの？」と聞き返
生徒は、「知るか。死ね」という暴言を吐いていた。

【枠組み】



第1部

学習と教育の実態

第1章

学生とはどのような存在か

第2章

教室はいかなる状態に陥るか

第3章

学生はどうすれば学習するのか

第4章

教育の質保証はどうすれば実現できるか

第2部

教育と研究の実態

第5章

教員とはどのような存在か

第6章

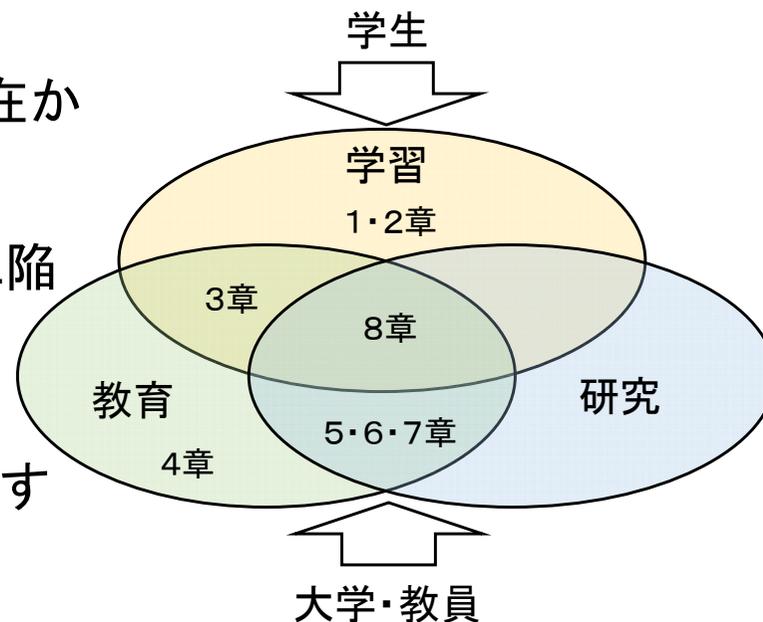
教員の採用人事はいかに行われるか

第7章

研究は教育の質保証に資するのか

第8章

学生は研究をどう捉えているか



第8章 学生は研究をどう捉えているか

の言葉で表現されている。その表現に差はあれど、これらの学生は、「学術研究」という意味合いで「研究」を捉えているといってもよいだろう。しかし、次に示す「語り」からは、「学術研究」という意味合いで「研究」を捉えている者ばかりではないことがうかがえる。

学生j：授業に対しての研究なのかなって勝手には思ってますけど。
 (中略) どうやったらわかりやすくみたいなのを研究しているのかなとかって勝手に思ってるんで。

学生h：(「研究」という言葉から) そんな湧かないですね
 学生i：(「研究」という言葉からのイメージは) あんまりでき

学生jの「授業に対しての研究なのかな」、「どうやったらわかりやすくみたいなのを研究しているのかな」という「語り」が、城(2022)でもみられたように、「研究」を「教材研究」の意味合いで捉えていることがうかがえる。ただし、「教材研究」の意味合いで「研究」を捉えている者は、調査対象者のなかではあった¹⁴⁾。すなわち、「教材研究」という意味合いで「研究」を捉えている者は教育系学部では少数ながらも存在するとしても、ほかの同様の傾向がみられない可能性は高いと考える。

ここで留意したいのは、学生h、iの「(「研究」という言葉から) そんな湧かないですね、イメージが」(学生h)、「(「研究」という言葉からのイメージは) あんまりできないですね」(学生i)といった「語り」のように、そもそも「研究」という言葉に対して何のイメージも存在することである。この点に鑑みれば、「研究」とは別の意味合い(例えば「教材研究」)で捉える者が少数なというよりは、「学術研究」のような意味合いで捉える者(学生jも含まれる)が少数ながらも存在すると思えよう。

さらに留意したいのは、学生h、i、jは、調査対象者の

の成績が低く、学習面での問題を多少なりとも抱える学生であるという点である。このことは、学習面での問題を抱える学生はそうでない学生に比べ、「研究」を「学術研究」のような意味合いでは捉えにくい可能性が高いことを示唆している。先述のように、この調査では、B大学では多数派であろう学習面での問題を抱える学生が実態よりもかなり少ないサンプリングとなっていることに鑑みれば、特に学習面での問題を抱える学生を中心に、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできる者は少数に限られる多く存在する可能性が考えられる。

学生j：授業に対しての研究なのかなって勝手には思ってますけど。
 (中略) どうやったらわかりやすくみたいなのを研究しているのかなとかって勝手に思ってるんで。

学生h：(「研究」という言葉から) そんな湧かないですね、イメージが。

学生i：(「研究」という言葉からのイメージは) あんまりできないですね。

表8-3 教員の行う「研究」に対して、「学術研究」のイメージを持っていたか

	全体	成績下位学生	成績中位学生	成績上位学生
持っていた	10.8%	15.4%	6.6%	15.5%
少し持っていた	35.1%	28.2%	36.3%	36.2%
あまり持っていなかった	38.7%	35.9%	40.7%	36.2%
持っていなかった	15.5%	20.5%	16.5%	12.1%

注：***は $p < 0.001$ 、**は $p < 0.01$ 、*は $p < 0.05$ 、†は $p < 0.1$ 。以下同様。

ポイント

【問い】

書名にも掲げる「大学はどうあるべきか」という根源的な問い

【対象】

研究対象として長らく等閑視され、印象論で語られがちな
ボーダーフリー大学に焦点を当てる。

【枠組み】

「大学」を語るうえで欠かせない、「学習」、「教育」、「研究」と
いう3つの視角からの総合的なアプローチ

【データ】

類書にはない、豊富かつ多様なデータ

【データ】

	調査の内容(実施時期)	分析対象・サンプル
第1章 学生とはどのような存在か	学部長を対象としたアンケート調査(2017年11月～2018年3月)等	偏差値50未満の大学の学部長を対象に実施・350名
第2章 教室はいかなる状態に陥るか	学生を対象としたアンケート(自由記述)調査(2011年10月～11月)	定員充足率80%未満のA大学の学生に実施・30名
第3章 学生はどうすれば学習するのか	教員を対象としたアンケート調査(2018年9月～2019年1月)	偏差値50未満の大学の教員を対象に実施・1,083名
第4章 教育の質保証はどうすれば実現できるか	学部長を対象としたアンケート調査(2017年11月～2018年3月)	第1章と同じ
第5章 教員とはどのような存在か	教員を対象としたアンケート調査(2018年9月～2019年1月)	第3章と同じ
第6章 教員の採用人事はいかに行われるか	JREC-IN Portallに掲載の公募情報(2020年度の1年間)等	2020年度に掲載された公募情報・9,456件
第7章 研究は教育の質保証に資するのか	教員を対象としたアンケート調査(2013年11月～2014年1月)	偏差値45以下の大学の教員を対象に実施・831名
第8章 学生は研究をどう捉えているか	学生を対象としたインタビュー調査(2021年11月～2022年2月)及びアンケート調査(2022年11月～2023年3月)	偏差値40前後のB大学の学生に実施・10名(4年生)、偏差値40未満のC大学・D大学の学生を対象に実施・計199名

第6章 教員の採用人事はいかに行われるのか

表6-5 学部系統別にみた「博士の学位の取り扱い」

		教授		准教授		講師		
		必須	実績	必須	実績	必須	実績	
人文・社会科学系	私立大学	非選抜型大学	27	100	32	134	31	114
			7.6%	28.0%	7.0%	29.3%	7.6%	28.1%
		低選抜型大学	24	283	34	410	20	334
		4.6%	54.1%	4.6%	55.1%	3.3%	54.5%	
	高選抜型大学	83	324	103	383	46	217	
		16.1%	62.9%	16.9%	63.0%	13.4%	63.1%	
参考	短期大学	0	15	0	16	0	14	
			0.0%	7.3%	0.0%	6.4%	0.0%	5.5%
		高等専門学校	0	0	1	2	2	3
		0.0%	0.0%	3.1%	6.3%	4.3%	6.5%	

「必須」と「実績」を合わせた割合でみると、その差異は顕著なものとなる。すなわち、いずれの職位についても、「非選抜型大学」群はその他2群に比べ「必須」+「実績」の割合が低く、3分の1強に留まっている（「教授」でいえば「非選抜型大学」群で35.6%であるのに対し、「低選抜型大学」群で58.7%、「高選抜型大学」群で79.0%）。

次に自然科学系についてみると、こちらも職位を問わず3群間で有意な差がみられる。すなわち、いずれの職位についても、「非選抜型大学」群はその他2群に比べ「必須」の割合だけでなく、「必須」+「実績」の割合も低い（「教授」でいえば「非選抜型大学」群で73.6%であるのに対し、「低選抜型大学」群で88.7%、「高選抜型大学」群で95.1%）。ただし、先の人文・社会科学系と大きく異なるのは、「非選抜型大学」群でも「必須」の割合は職位を問わず割合が高く、「必須」+「実績」の割合では

表6-5 学部系統別にみた「博士の学位の取り扱い」

		教授		准教授		講師		
		必須	実績	必須	実績	必須	実績	
人文・社会科学系	私立大学	非選抜型大学	27	100	32	134	31	114
			7.6%	28.0%	7.0%	29.3%	7.6%	28.1%
		低選抜型大学	24	283	34	410	20	334
		4.6%	54.1%	4.6%	55.1%	3.3%	54.5%	
	高選抜型大学	83	324	103	383	46	217	
		16.1%	62.9%	16.9%	63.0%	13.4%	63.1%	
参考	短期大学	0	15	0	16	0	14	
			0.0%	7.3%	0.0%	6.4%	0.0%	5.5%
		高等専門学校	0	0	1	2	2	3
		0.0%	0.0%	3.1%	6.3%	4.3%	6.5%	

注：上段は実数、下段は割合。表6-7も同様。

第6章 教員の採用人事はいかに行われるのか

1 | アンケート調査からみえる採用人事

公募情報に基づく分析に先立ち、留意しておかなければならない点がある。それは、ボーダーフリー大学における採用人事では公募の利用が相対的に少ない可能性が高いという点である。本章のデータセットを用

表6-2 講師以上の職位での採用人事は純粋な公募だったか

	全体	社会科学系	理・工学系
純粋な公募だった	48.4%	52.6%	43.5%
形式上は純粋な公募だったが採用の見込みがあった	15.5%	13.3%	19.6%
純粋な公募でなかった	36.1%	34.1%	37.0%

注：*** は $p < 0.001$ 、** は $p < 0.01$ 、* は $p < 0.05$ 、† は $p < 0.1$ 。以下同様。

表6-2 講師以上の職位での採用人事は純粋な公募だったか

	全体	社会科学系	理・工学系
純粋な公募だった	48.4%	52.6%	43.5%
形式上は純粋な公募だったが採用の見込みがあった	15.5%	13.3%	19.6%
純粋な公募でなかった	36.1%	34.1%	37.0%

注：*** は $p < 0.001$ 、** は $p < 0.01$ 、* は $p < 0.05$ 、† は $p < 0.1$ 。以下同様。

は、「純粋な公募でしたか。」とたずね、以下に示す選択肢を求めた結果を、学部系統間でのカイ二乗検定による検定結果を示したものである。なお、この結果には、助教から講師に昇任した者も含まれている可能性があることに注意する。

みると、「純粋な公募だった」者は多くを占めているわけではない。むしろ、「形式上は純粋な公募だったが採用の見込みがなかった」者が多くを占めている（63.9%）。すなわち、残る「純粋な公募でなかった」、いわゆる「（純粋な）一本釣り」である。なお、こうした傾向は、学部系統によって大きくは変わらない。

こうした結果は、ボーダーフリー大学教員のうち、講師以上の職位での採用人事が公募だった者は大多数を占めているわけではなく、「（純粋な）一本釣り」だった者が少なくない可能性を示唆している。すなわち、こうした知見は、先述の「ボーダーフリー大学における採用人事では公募の利用が相対的に少ない可能性が高い」ことを支持するものといえる。

1-2 | どのくらいの大学・短大にエントリーしていたか

次に、「ボーダーフリー大学」教員は大学教員として就職するまでにどのくらいの大学・短大にエントリーしていたのか、という点について確認していこう。表6-3は、「講師以上の職位で採用されるまでに、どのくらいの数、エントリーしましたか。」とたずね、適当な数の記入を

除ききれない。

そこで本節では、冒頭で紹介した「ボーダーフリー大学」教員を対象としたアンケート調査を手掛かりに、まずは当該大学の採用人事の特徴を確認したい。なお、この調査の詳細については第7章を参照いただきたいのだが、分析対象を若手教員（40代前半まで）に限定している点だけは特記しておく。すなわち、私立大学より定年の早い国公立大学から異動してくる高齢教員は少なくないのだが、こうした教員が分析対象に含まれていないことには留意されたい。

1-1 | 採用人事のどの程度が公募だったか

まず、「ボーダーフリー大学」における採用人事のどの程度が公募だったのか、という点について確認していこう。表6-2は、「講師以上の

ポイント

【問い】

書名にも掲げる「大学はどうあるべきか」という根源的な問い

【対象】

研究対象として長らく等閑視され、印象論で語られがちな
ボーダーフリー大学に焦点を当てる。

【枠組み】

「大学」を語るうえで欠かせない、「学習」、「教育」、「研究」と
いう3つの視角からの総合的なアプローチ

【データ】

類書にはない、豊富かつ多様なデータ

【問い】に迫るための論点

1. 学習面での問題の克服を主たる教育目的とする
2. 経営サイドの認識を改める
3. 「大学」としてのアイデンティティを再考する
4. 大学の種別化・機能分化を考える
5. 「研究」成果を「教育」へ還元する



教育の質保証を実現するうえでの「正しい選択」とは？

- ・「非大学型高等教育機関」のように（事実上）「研究」を前提とせず「教育」に特化した形でシフトしていくという選択肢
- ・「教育」と「研究」を主要な機能とする「大学」として、教育だけでなく研究も重視するという選択肢